

「ジェンダー・ステレオタイプ」と 「ジェンダー・フリー」

吉 澤 昌 恭*

はじめに

1. 青野・森永・土肥の主張

- 1.1. 生物学的に女と男は連続している① —— 性分化と性分化異常
- 1.2. 生物学的に女と男は連続している② —— 男女の体力差
- 1.3. ジェンダー・ステレオタイプが男女の心理的特性を生み出す
- 1.4. 理想としての自分らしさ, 両性具有, そして, ジェンダー・フリー

2. 青野・森永・土肥の主張への批判

- 2.1. 性分化異常なのか連続なのか?
- 2.2. 体力の差についての主張への批判
- 2.3. ジェンダー・ステレオタイプについての主張への批判
- 2.4. ジェンダー・フリーへのコメント

3. 女ももっと幸せに男ももっと幸せに

- 3.1. 事実と価値① —— 男女の違いと女性差別
- 3.2. 事実と価値② —— 差別なき差異
- 3.3. ピーズ夫妻の問題提起

は じ め に

青野篤子氏・森永康子氏・土肥伊都子氏の『ジェンダーの心理学 改訂版⁽¹⁾』をよすがにして, フェミニズムについて考えてみることにしたい。この著作の焦点は男女の差(生殖器の差, 体格・体力の差, 感じ方・考え方の差)であり, 中心論点は,

* 広島経済大学経済学部教授

(1) 青野篤子・森永康子・土肥伊都子『ジェンダーの心理学 改訂版「男女の思いこみ」を科学する』ミネルヴァ書房, 平成16年。

①生物学的に女と男は連続したものである、②男女の心理的特性は社会の産物である、の2つである。

1で、『ジェンダーの心理学』で青野氏・森永氏・土肥氏が述べていることを整理し、2で、彼女たちの主張を批判的に検討したい。そして、最後に(3)、男女の関係のあるべき姿について考えてみることにしよう。

1. 青野・森永・土肥の主張

1.1. 生物学的に女と男は連続している① —— 性分化と性分化異常

『ジェンダーの心理学』の第1章の執筆担当者である青野篤子氏は、「女性と男性の間に無数の移行形が存在し、生物学的には女性と男性は連続したものである」という議論を展開している。

『ジェンダーの心理学』の第1章は、無性生殖・有性生殖についての議論から始められている。そして、話は「性の分化⁽²⁾」へと進んで行く。青野氏の叙述に従うなら、女性と男性への分化は、以下の4段階を通る。

1. 性染色体の組み合わせ
2. 性腺（精巣と卵巣）の形成
3. 外性器（ペニスとクリトリス）の形成
4. 内性器（前立腺と子宮）の形成

〔山内兄人・新井康允編著『性を司る脳とホルモン』（コロナ社、平成13年）の叙述（161-165頁）によれば、性分化の順序は、「性染色体の決定 → 性腺の決定 → 内性器の決定 → 外性器の決定」となっている。〕

以上のような性分化が正常な形で進展しないために起ってくるのが「性分化異常」である。こういった「性分化異常」の存在を踏まえて、青野氏は次のように述べている。

「人間が女性と男性に分かれるのが基本形だとしても、女性と男性の間に無数の移行形が存在し、100%の女性も100%の男性も存在しない。そもそも発生的には女性と男性は同じ構造から出発するが、染色体の組み合わせ、遺伝子やホルモン

(2) 青野・森永・土肥、同上、2-4頁。

の働きによって、その分化の仕方は個々まちまちなのである。…中略…生物学的には女性と男性は連続したものであって、一人ひとりが男性化の度合いと女性化の度合いが異なるのだと言えよう。

ちょうどその中間に位置するのが、いわゆる半陰陽と呼ばれる人たちである。これは、男性の構造と女性の構造を部分的に合わせもつことで、睪丸と卵巣、⁽³⁾子宮、そして短小ながらペニスもあるというような場合が存在するのである。」
(傍点は、吉澤が付した。)

1.2. 生物学的に女と男は連続している② —— 男女の体力差

ある人（たち）の主張を批判する論文を書こうとする場合、まず最初に、その人（たち）の主張をその人（たち）の立場に立って理解しようと努め、その主張を可能な限り公平に紹介しなければならない、と筆者は考えている。とはいえ、青野氏・森永氏・土肥氏の「男女の体力差」についての議論を、筆者は十分に理解することができない。3氏共同執筆の『ジェンダーの心理学』の最終章（第7章）で、次のように述べられている。

「読者の多くは、中学校や高校の体育で持久走を走った経験があるだろう。その時、走る距離に男女で差がつけられなかっただろうか。実際に、男の子よりも短い距離で精一杯だった女の子もいたかもしれないが、『もっと走れるのに』と悔しい思いをした女の子もいるに違いない。このように男女で差をつけることは、一見『体力の弱い』女性への配慮に見えるが、実は女性から訓練の機会を奪っているのかもしれない。これは『好意的』な差別…中略…の一例であるが、『敵意のある』差別とは違って、私たちが差別だと気づきにくいものだ。」⁽⁴⁾
(傍点とアンダーラインは、吉澤が付した。)

「一見『体力の弱い』女性」という叙述をどう解釈したらよいのだろうか？ 「一見～のように見えるが…」という表記は、通常の日本語の用法に従うなら、「実態は～ではない」ということを含意している。青野氏・森永氏・土肥氏は、男女の間に体力差はないと考えているのだろうか？ よく分からない。

また、先の引用文のアンダーラインを付した部分も、筆者には理解の及ばないものである。持久走の距離に関して、男女の間で差が設けられている場合、それは取

(3) 青野・森永・土肥、同上、6頁。

(4) 青野・森永・土肥、同上、142頁。

り除かれるべきであるのか、それとも、存続させられるべきであるのか？

1.3. ジェンダー・ステレオタイプが男女の心理的特性を生み出す

『ジェンダーの心理学』の最も重要な論点へと議論を進めることにしよう。「ジェンダー・ステレオタイプ」がそれである。

『ジェンダーの心理学』の第1章で、青野氏は、赤ん坊が産み落とされた社会は女性用と男性用に仕切られていて、赤ん坊は性器の形状（クリトリスかペニスか）によって、女か男のいずれかに決められる、という議論を展開している。⁽⁵⁾しかし、「性分化異常」が存在するのであるから、「本来あいまいさをはらむ性別を、出生直後に外性器によって決めてしまうことは、実は危険きわまりないことなのだ」と青野氏は言う。そして、青野氏の議論は、近代産業社会において「男は仕事・女は家庭」という性別分業が生み出された、という方向へ進んで行く。青野氏は次のように述べている。

「近代産業社会は、自然の中で男女が協力して生産活動を行うという生活スタイルを、『男は仕事・女は家庭』という性別分業へと変化させたと言われている。それを機に、男性には仕事にふさわしい特性が、女性には家庭にふさわしい特性が付け加わったのである。」⁽⁷⁾

「男は仕事・女は家庭」に代表されるような、「男性と女性に対して人々が共有する、構造化された思いこみ（信念）は、ジェンダー・ステレオタイプとよばれている」と、⁽⁸⁾『ジェンダーの心理学』第2章の執筆者である土肥氏は述べている。

近代産業社会が生み出したとされる、仕事にふさわしい男の特性とは、「道具性・作動性・行動力・知性」といったものであり、家庭にふさわしい女の特性とは、「表出性・共同性・従順と美の複合」といったものである。⁽⁹⁾そして、こうした言葉によって象徴される男女の感じ方・考え方の差、つまり、男女の心理的特性の差は、男女に生得的に備わっているものではなく、社会の産物であるというのが、『ジェンダーの心理学』の最大のテーマである。

(5) 青野・森永・土肥，同上，7頁。

(6) 青野・森永・土肥，同上，7頁。

(7) 青野・森永・土肥，同上，11頁。

(8) 青野・森永・土肥，同上，27頁。

(9) 青野・森永・土肥，同上，30頁。

1.4. 理想としての自分らしさ、両性具有、そして、ジェンダー・フリー

『ジェンダーの心理学』の第4章で、森永氏は、「男らしさ」「女らしさ」と「自分らしさ」の間に食い違いが生じた時に、どのようなことが起るか、を論じている⁽¹⁰⁾。「男はかくあるべし」「女はかくあるべし」という社会の期待に反発を感じ、そうした期待から逸脱した行動に出る人は社会的に大きなダメージを受ける、と森永氏は言う。

「男らしさ」「女らしさ」と「自分らしさ」が衝突する時には、「自分らしさ」を優先せよというのが、『ジェンダーの心理学』の著者たちの立場である。そこから更に進んで、「精神的に健康で柔軟性のある、女性性（女らしさ）と男性性（男らしさ）を兼ね備えたアンドロジニー（心理的両性具有：psychological androgyny）」⁽¹¹⁾を目指せ、と提唱される。

このような主張から、「男らしさ」「女らしさ」そのものをなくしてしまおうとする「ジェンダー・フリー」の主張へは、ほんの一步ではないだろうか。土肥氏は、「執筆者紹介と読者へのメッセージ」で、次のように述べている。

「“アンドロジニー”をめざす心理学者より一言：時代の必然として、今まさに、ジェンダー・フリーの波が次々と押し寄せています。そのとき、防波堤のような石頭では、押し寄せる時代の波は苦痛にしかありません。そうではなく、むしろ身軽に海に出て、波乗りのスリルを楽しめてしまう、柔らかい頭のアンドロジニー人間が増えたらいいなと思います。」⁽¹²⁾

2. 青野・森永・土肥の主張への批判

2.1. 性分化異常なのか連続なのか？

「性分化異常」の存在を論拠にして、青野氏は、「男女の性別は本来あいまいさを孕むものであり」「生物学的に女性と男性は連続している」という議論を展開している（1.1参照）。これがベースになって、男女間の分類を可能な限りなくそうとする「ジェンダー・フリー」の運動が繰り返されているのであるが、そのことに対して、少なくとも2つの批判が可能である。

まず第1に、「生物学的に女性と男性は連続している」という主張そのものが誤

(10) 青野・森永・土肥、同上、85-86頁。

(11) 青野・森永・土肥、同上、18頁。

(12) 青野・森永・土肥、同上、164頁。

りではないか？ ヒトは、「非常に男らしい男—普通の男—男らしくない男—性分化異常—女らしくない女—普通の女—非常に女らしい女」というような連続した分布を持つ種ではなく、少数の「性分化異常」を別にすれば、「性分化異常のない男」と「性分化異常のない女」という相当違った2つの存在によって構成されている種ではないのか？ これは、生物学その他の「科学」によって答えを与えられるべき問である。

ジェンダー・フリー運動に対する第2の批判は次の通りである。仮に、「生物学的に女性と男性が連続している」ということが正しいとしても、そこから直ちに、「男女間の分類を可能な限りなくすべきである」という結論を引き出し得るわけではない。人口統計では、65歳以上の人々を高齢者に分類する。男と女の場合と違って、64歳と65歳は明らかに「連続」している。だからといって、何人がこの65歳の分類基準を廃棄せよと言うだろうか？ この分類基準は、例えば、年金制度の運用にとって決定的に重要である。

分類の基準を複数持って、目的に合わせてそれらを使い分けるとというのが、まともな行き方ではないだろうか？

2.2. 体力の差についての主張への批判

『ジェンダーの心理学』の第1章にある「陸連も、染色体・遺伝子によるセックス・チェックを廃止」と題されたコラムで、青野氏は次のように述べている。

「陸上競技の世界では、男性が女性の種目に参加するのを防ぐために、長い間染色体検査が行われていた。しかし、最近、性別を決めるのに染色体検査は適当ではないとの判断が下された。

1992年、国際陸上競技連盟は、性染色体による女性検査の廃止を決定した。…中略…〔性分化異常の存在の故に〕染色体や遺伝子による性別の判定は科学性を欠くとの判断がなされたのである。そして、一見原始的とも思われる視診に戻ってきている。しかし、本文（『ジェンダーの心理学』の第1章のこと、吉澤註）でも述べているように、身体の性もあいまいな場合があるのである。したがってセックス・チェックそのものがナンセンスだということになる。⁽¹³⁾（〔 〕内は、吉澤が挿入した。）

(13) 青野・森永・土肥、同上、3頁。

このコラムによって青野氏はいかなることを主張しようとしているのだろうか？ 青野氏は、「男女の区別を行うための『完璧な』方法はない」という所から、直ちに、「男女の区別そのものがナンセンスだ」という結論を引き出しているが、これは常軌を逸している（と少なくとも筆者には思われる）。陸上競技において男女の区別を設けなくてよいのだろうか？ もし、そうだとすれば、柔道やレスリングの試合も男女混合で行えということになるのだろうか？

2.3. ジェンダー・ステレオタイプについての主張への批判

「男女の心理的特性は社会の産物である」という、『ジェンダーの心理学』における最も重要な主張を批判することにしよう。まず、認知の枠組としての「仮説」の必要性について論じ（2.3.1）、次に、脳科学の研究成果に言及する（2.3.2）。ここでの「仮説」は、「男女の心理的特性は社会の産物である」というフェミニズムの中心命題に決定的な打撃を与え得るものである。2.3.3で、こうしたことに対する森永氏・青野氏の反応を見てみることにしよう。

2.3.1. 認知の枠組としての仮説

(1) バケツとサーチライト

ポパーは、知識理論（あるいは認識論）を二種類のものに区別する。「科学のバケツ理論」と「科学のサーチライト理論」がそれである。⁽¹⁴⁾「科学のバケツ理論」によれば、知識（Knowledge）よりも知覚（perception）が先行する。そして、知識は、「集積された知覚」から成り立っているか（素朴経験主義）、さもなくば「吸収され・貯蔵され・分類された知覚」から成り立っている（ペーコンヤカントによって支持された見解）。

ポパーは、「科学のバケツ理論」は誤りである、と言う。なぜなら、科学において決定的な役割を演ずるのは知覚ではなく観察であり、また、観察には、常に、問・問題・何かしら理論的なもの（something theoretical）が先行する、というのがその理由である。

ポパーは、「科学のサーチライト理論」の支持者である。ここでは、①観察は、何かしら理論的なもの、即ち、仮説を必要とし、②この仮説が「いかなる種類の観

(14) Popper, Karl R.: *The Bucket and the Searchlight: Two Theories of Knowledge, in: Objective Knowledge, An Evolutionary Approach*, Oxford University Press, Oxford 1972, revised ed. 1979. (森 博訳『客観的知識 —— 進化論的アプローチ』木鐸社、昭和49年)。

察を行うべきか」を照らし出すサーチライトの役割を果すことになる。

さて、複数のサーチライト（仮説）が存在する場合、どれを採択すべきか？ 事実と仮説をつき合わせて、事実と合致しない仮説は「反証」されたものとして廃棄せよ、というのがポパーの答えである。こうした作業を続けることで、我々は一步一步と真理へ近づける、というのである。

問題の核心は、有限個の事例から説明的普遍理論を導き出すことはできない、という所にある。つまり、複数の事例から一般法則を見い出そうとする「科学のパケツ理論（認識論の用語を用いるなら、帰納の原理）」は成り立たないということになる。そこで、ポパーは「反証主義」を提示したのであった。「経験的理由」によって、ある説明的普遍理論を「立証すること（verification）」と「反証すること（falsification）」の間に存在する差異が、ポパーの立論の基礎を成している。例えば、次の2つの命題について考えてみよう。

1. すべてのカラスは黒い。
2. ここに「黒くない」1羽のカラスがいる。

第1命題は、第2命題によって簡単に反証されてしまう。これを科学に当てはめると、次のようになる。

1. 科学理論（即ち、説明的普遍理論）は立証できない。
2. しかし、時として、科学理論が反証されることがある。
3. 従って、科学の営みとは、「事実（即ち、経験的理由）」の助けを借りて、誤った理論を捨てて行くプロセスである。

(2) 反証の難しさ

しかし、科学における営みは、上述の如き単純なものではない。ポパーの弟子であったラカトシュは、2つの点から、ポパーを批判している。①科学理論の反証のために用いられる「テスト言明」そのものが「理論」に依拠している、②科学者はポパーの論じたように行動しない、というのがそれである。①から始めることにしよう。

ポパーの議論の核心は、「テスト言明が真であるという仮定は、時として、ある説明的普遍理論が偽であるという主張を、正当化することを我々に可能にさせる」、という点にある。しかし、日常生活においてはいざしらず、科学においては、テス

ト言明が真かどうか、ということそれ自体が問題となり得るのである。従って、「説明的普遍理論 vs. テスト言明」という図式は、厳密に言えば誤っていることになる。正しい図式は、「ある説明的普遍理論 vs. テスト言明の背後にある・別の説明的普遍理論」ということになる。

このことを理解する上での格好の事例が、1815年にエディバラ大学出の医師プラウト（William Prout）が軽い気持で提出した仮説である。それは、「すべての純粋な化学元素の原子量は整数である」、というものであった。しかし、当時、プラウトの主張と折り合わない変則事例がかなりあった。ポパー流の「素朴な」反証主義によれば、プラウトの仮説は放棄されねばならない、ということになる。ところが、プラウトの仮説の擁護者は、当時の関連「実験技術」が信用の置けないものであり、テスト言明それ自体に難がある、と考えたのである。

「プラウトの理論の擁護者たちは、…中略…自分たちの主張に対して反対証拠を呈している…中略…理論を覆すことに、専ら乗り出したのである。この作業のために彼らは当時すでにその学問的基礎を固めていた分析化学を改革せねばならず、それに対応して純粋な元素を分離してとり出す実験技術をも改良しなければならなかった。プラウトの理論は、実際、化学物質の精製にそれまで適用されていた数々の理論を次から次へと覆していった。」⁽¹⁵⁾

プラウトの仮説は1世紀の風雪に耐え、最終的には勝利を得たのである。この事例に鑑みるなら、素朴な反証主義は科学の発展にとって有害である、とラカトシュは主張している。⁽¹⁶⁾

* * *

以上のようなポパーに対するラカトシュの批判は、第2の批判（科学者はポパーの論じたように行動しない）へと通じて行くのである。

科学者はポパーの論じたようには行動せず、このことによって、ポパーの素朴反

(15) Lakatos, Imre: *The Methodology of Scientific Research Programmes*, Cambridge University Press 1978, paperback ed. 1980, p. 53. (村上陽一郎・井山弘幸・小林傳司・横山輝雄共訳『方法の擁護 —— 科学的研究プログラムの方法論』新曜社, 昭和61年, 80頁)。

(16) Lakatos, Imre, *ibid.*, p. 55. (同上, 83頁)。

証主義は「反証される」, というラカトシュは言う。ポパーの素朴反証主義は次のような性格を有している。⁽¹⁷⁾

1. 科学においては、前もって合意された潜在的な反証者を持つ齊合的な仮説が提示されねばならない。潜在的な反証者とは、その時代の実験技術の助けを借りて真理値を決定し得るような「基礎言明（即ち、テスト言明）」のことである。
2. 制御された実験によるテストをくり返さねばならない。
3. 潜在的な反証者が棄却されるならば、当該仮説は「検証された（corroborated）」と宣告される。検証された仮説には、暫定的な支持が与えられる。
4. 潜在的な反証者が受容されるならば、この仮説は「反証された（falsified）」と宣告され、放棄されねばならない。

科学者はこのようには行動しない、とラカトシュは言う。⁽¹⁸⁾ 一般に、科学者は自らの仮説と折り合いのつかない変則事例に対して、アド・ホックな補助仮説を案出するか、変則事例を無視してしまう、というのである。

「科学者は厚顔なのだ。彼らは事実が理論に合わないからといって理論をおいそれとは捨てない。そういう場合彼らは、通常は、新しく救済用の仮説を案出して、理論に合わない事実を、単なる一つの変則事例と呼べるようにしてしまった上でそれを説明してしまうか、その変則事例をうまく説明できない場合は、それを無視して、別の問題に関心を移してしまうのである。科学者は、変則事例や、手強い事例⁽¹⁹⁾については語るが、反証事例については語ろうとしないことに注目しよう。」

* * *

諸種の仮説の内からどれかを選択して、「真理に接近する」というのは容易なことではないのである。

(3) 土肥の論じ方

『ジェンダーの心理学』の第2章で、土肥氏は次のように述べている。

(17) Lakatos, Imre, *ibid.*, p. 142. (同上, 206頁)。

(18) Lakatos, Imre, *ibid.*, p. 4, p. 126, p. 147. (同上, 6-7頁, 183-184頁, 214頁)。

(19) Lakatos, Imre, *ibid.*, p. 4. (同上, 6-7頁)。

「人間の心は、インプットされた情報を入力し、計算や検索などのさまざまな処理をされてアウトプットされるというコンピュータのしくみと共通した点をもつ。インプットは目や耳などの感覚器でなされ、アウトプットは行動である。ただし、人間の場合、外界に注意し記憶し、判断し、推論し、記憶を再生するというひとつづきの思考過程において、それを方向づける知識、あるいは枠組みからの影響を受ける。これが、スキーマ (schema) と呼ばれるものである。」⁽²⁰⁾

ここまではよい。また、上の引用分にある「枠組み」「スキーマ」は、ポパーの「サーチライト」や「仮説」に相当する、と考えてよいだろう。

土肥氏は、更に、次のように論じている。

「様々なスキーマの中でも、男女のカテゴリーに基づいたものが、ジェンダー・スキーマである。ジェンダー・スキーマは、男女の特徴を見分けるための認知の枠組みとして働く。そのため、ジェンダー・スキーマが強いということは、その人のジェンダー・ステレオタイプは強固なものだと考えられる。」⁽²¹⁾ (傍点は、吉澤が付した。)

自らの論敵の仮説 (スキーマ) に対して、その当否を論ずる以前に、「ステレオタイプ」といったような、マイナスのイメージを持たせるような表現を用いることは、アンフェアではないか？

2.3.2. 脳科学のインパクト

脳科学における研究成果は、フェミニズムに決定的な打撃を与えつつある。そうした脳科学の研究成果に立脚した、『話を聞かない男、地図が読めない女』⁽²²⁾ がベスト・セラーとなった。この本の核心は、「脳の配線とホルモンが男女の思考・行動を決定する」という点にある。これは、フェミニズムの「男女の心理的特性は社会の産物である」という中軸命題と、真向から対立するものである。

(20) 青野・森永・土肥『ジェンダーの心理学』, 32頁。

(21) 青野・森永・土肥, 同上, 33頁。

(22) Pease, Allan / Pease, Barbara: *Why Men Don't Listen and Women Can't Read Maps*, Orion-PTI 1999, Orion Books 2001. (藤井留美訳『話を聞かない男、地図が読めない女 男脳・女脳が「謎」を解く』主婦の友社, 平成12年)。

(1) 脳の進化

まず、脳の配線 (the wiring of our brain) の議論から始めることにしよう。1980年代後半から、男女の違い、特に男女の脳の働きの違いについての研究が盛んになった。コンピュータを利用した脳のスキャン装置が登場したおかげで、脳の断面を「生きたまま」観察して、精神という広大な領域を垣間見ることが可能になったからである。⁽²³⁾

男女の脳の働きの違いは何に由来するのであろうか? 「男は狩をし・女は家を守る」という役割の違いに応じて脳が進化を遂げたから、というのがピーズ夫妻の提示する仮説である。

「男と女が異なる進化をしてきたのは、その必要があったからだ。男は狩りをして、女は木の実や果実を採った。男は守り、女は育てた。それを続けた結果、両者の身体と脳は、まったく別ものになった。

男女の身体は、それぞれの役割に合わせて発達していった。たいていの男は女より背が高く、力も強くなった。そして脳のほうも、役割に応じて進化していった。

こうして何百万年ものあいだに、男と女の脳はちがう方向に進化していき、その結果、情報の処理のしかたまで変わってきた。いまや男と女では、考えかたは もちろん、理解のしかた、優先順位、行動、信念までことごとくちがう。⁽²⁴⁾」

女は男よりもはるかに精巧な感覚能力を持っている、とピーズ夫妻は言う。

「哺乳類のメスはみんなそうだが、女は男よりもはるかに精巧な感覚能力を持っている。子どもを育て、家を守る立場上、他人のごくわずかな気持や態度の変化に気づく必要があるのだ。俗に『女の直感』などと言うが、それは相手の様子や行動のちょっとした部分や、かすかな変化を見逃さないということなのである。昔から女の直感は、浮気する男たちをうろたえさせ、数々の悪事をあばいてきた。⁽²⁵⁾」

男は女より会話が下手で、話をする時には左脳しか使っていないの⁽²⁶⁾に対して、女

(23) Pease, Allan / Pease, Barbara: *ibid.*, p. 5. (同上, 20頁)。

(24) Pease, Allan / Pease, Barbara: *ibid.*, p. 5. (同上, 19頁)。

(25) Pease, Allan / Pease, Barbara: *ibid.*, p. 19. (同上, 34頁)。

(26) Pease, Allan / Pease, Barbara: *ibid.*, p. 74. (同上, 83頁)。

は会話が上手であり且つ好きである。そして、女がしゃべる時には左右の脳を使う。

「しゃべっているときの女の脳をスキャンすると、前のほうが左右両方とも活発になっている。またこのときは、聴覚機能も働いている。そのため女は、複数の話題についてしゃべりながら、同時に他人の話も聞くという驚くべきマルチトラック能力を発揮できる。この事実をはじめて知ると、男は女に恐れいる——それまでただ口うるさいだけだと思っていたのだが。⁽²⁷⁾」

男の言語能力は女には及ばないが、空間能力に関しては男が上回っている。これは、男が狩人として進化してきたからである。⁽²⁸⁾

(2) ホルモンが男女の思考・行動に影響を与える

『話を聞かない男，地図が読めない女』の第7章で、ホルモンが男女の思考・行動に与える影響が論じられている。

エストロゲンという女性ホルモンは、満足感・幸福感を女にもたらし、子育てや家を守るといった行動で中心的な役割を果たす。そして、プロゲステロンというホルモンは、母性愛や誰かの世話をしたいという感情を喚起し、女に子育てを遂行させる。⁽²⁹⁾

他方、テストステロンは、成功・達成・競争のホルモンで、このホルモンが、男や動物のオスを攻撃的にさせる。⁽³⁰⁾

(3) ホルモンが男女の性別決定に影響を与える

『話を聞かない男，地図が読めない女』の第8章で、ホルモンと男女の性別決定の関係が論じられている。

人間の胎児は、女が基本形である。⁽³¹⁾

受精してから6～8週間に、XYの染色体を持つ男の胎児は、アンドロゲンという男性ホルモンを大量に浴びて、精巣が形成される。その後、女を基本形にした脳にも変化が生じて、男性用のフォーマットになるのである。⁽³²⁾

(27) Pease, Allan / Pease, Barbara: *ibid.*, p. 91. (同上, 99頁)。

(28) Pease, Allan / Pease, Barbara: *ibid.*, p. 110. (同上, 116頁)。

(29) Pease, Allan / Pease, Barbara: *ibid.*, p. 172. (同上, 177頁)。

(30) Pease, Allan / Pease, Barbara: *ibid.*, p. 178. (同上, 184頁)。

(31) Pease, Allan / Pease, Barbara: *ibid.*, p. 189. (同上, 191頁)。

(32) Pease, Allan / Pease, Barbara: *ibid.*, pp. 189–190. (同上, 192頁)。

しかし、この時期に男性ホルモンが不足すると、脳の作りがいくらか女っぽい男の子が生まれ、この人物は思春期を迎えるとゲイになる可能性が高い。あるいは、男性生殖器をもちながら・脳は完全に女脳であるという、「トランスジェンダー(transgender)」となる。また、時たま、男女両方の生殖器を持って産まれてくる半陰陽の子も存在するのである。

2.3.3. 森永と青野の反応

「脳の配線とホルモンが男女の思考・行動を決定する」ということになれば、「男女の心理的特性は社会の産物である」という主張を中軸命題とするフェミニズムは、ガラガラと音を立てて崩れてしまう。フェミニストには、①脳科学の研究成果を無視するか、②それに反論するか、2つにひとつしかない(ように筆者には思われる)。森永氏と青野氏が、脳科学の研究成果への反論を試みている。

(1) 森永の反論

森永康子氏に『女らしさ・男らしさ』という著書がある。同書の終章で、森永氏は、ピーズ夫妻の『話を聞かない男、地図が読めない女』に言及している。⁽³³⁾

森永氏は、『話を聞かない男、地図が読めない女』を買って、大学の研究室に置いておいたそうである。この本は学生に人気があったようで、森永氏は次のように述べている。

『話を聞かない男、地図が読めない女』も人気があって、何人かの学生がこの本を読んだようです。そして、学生たちのこんなおしゃべりを耳にしました。『この本、うちの両親に読ませてやりたい。いつも、父が運転して“この信号はどっちに行くんや?”と聞くと、地図を見ている母が“そんなもん、わからんわ”とか言って、ケンカになるんだよね』。

この学生に限らず、この本を読んで『なるほど、そうだったのかあ』と納得する人も多かったようです。⁽³⁴⁾

勿論、フェミニストとしてはこれで済ませるわけにはいかないだろう。そこで、森永氏は次のように主張する。

(33) 森永康子『女らしさ・男らしさ ジェンダーを考える』北大路書房、平成14年、101-104頁。

(34) 森永康子、同上、102頁。

「たとえば、本当に、女性のほうが地図が読めない人が多いとしても、それは、もしかしたら子どものころから『女の子なんだから』とあまり遠くに遊びに行かせてもらえなかったからとか、どこかへ行くときにはいつも親がいっしょで、道順を覚える必要がなかったからとも考えられませんか。⁽³⁵⁾」

森永氏の上の主張（あるいは、仮説と言いかえてもよい）を「反証」することは容易ではない。[「反証の難しさ」については、2.3.1.(2)を参照されたし。]

会話についても、地図についてと同様の議論を展開した後に、森永氏は次のように述べている。

「地図や会話のことなら、脳の話をもち出さなくても、ジェンダーでも説明できるのです。もちろん、『話を聞かない男，地図が読めない女』の著者が書いていることが正しいのかもしれませんが。女性と男性の違いは、生物が進化していく過程で身につけたものなのかもしれません。でも、もしかしたら、ジェンダーかもしれない⁽³⁶⁾という可能性も捨てきれませんよね。」（傍点は、吉澤が付した。）

「ジェンダーかもしれないという可能性も捨て切れませんよね」という物言いは弱々しげである。それに対して、青野篤子氏は、はるかに戦闘的である。

(2) 青野の反論

まず、脳科学の研究成果についての青野氏の主張を引用することから始めよう。第1は男女の言語能力についてのものである。

「近年さかんに主張されているのは、この左右の脳の分業の仕方と脳梁の太さが男性と女性とで違っており、これが男女の言語能力の差をもたらしているという説である。これによると、まず、左右の脳をつなく脳梁が女性の方で太いということ、そしてことばに関した問題を解くとき、男性（右利き）の脳は主に左半球が働くが、女性の脳は左半球も右半球も同じように働いているという。また、女性には失語症が少ない、発達段階のある時期に女兒の方が読み書きが良くできる、脳梁の太い人の方がある種の言語テストで成績が良いなどの報告がある…中略…ここで、『女性は言語活動で左右の脳を使い、脳梁が太いから、言語能力にすぐ

(35) 森永康子，同上，102-103頁。

(36) 森永康子，同上，103頁。

れている』という強引な結論が出されるのである。まず女性はことばが巧みというステレオタイプが存在し、心理学の研究がそれに沿った結果を生み出し、生物学で証拠固めをしてステレオタイプを補強するという具合である。⁽³⁷⁾ (傍点は、吉澤が付した。)

自らのライバル「仮説」に対して、「強引な」とか「ステレオタイプ」といった、マイナスイメージを持つ修飾語を冠するのは、アンフェアではないだろうか？
ホルモン（アンドロゲン）について、次のような叙述がある。

「生物学の分野では、アンドロゲン（中でも強力なのがテストステロン）が攻撃性を高めるという動物実験の結果や、胎児期に過剰なアンドロゲンの作用を受けた女性がやや攻撃的になるとの報告がある…中略…心理学の研究と生物学的研究が結びついて、攻撃性－ホルモン仮説もかなり信憑性の高いものと考えられている。

しかし、この仮説には、いくつかの反論が可能である。⁽³⁸⁾ (傍点とアンダーラインは、吉澤が付した。)

ホルモンに関する研究成果は「かなり信憑性の高いものと考えられている」のに、それに十全の顧慮を与えることもないままに、反射的に反論にかかろうとする姿勢は、常軌を逸したものである、と筆者は考える。

最も問題とすべきは、次の叙述である。

「ある種の能力と脳の構造や機能との間に相関があったとしても、どちらが原因でどちらが結果かはわからない。むしろ、脳は生後のさまざまな経験や学習を重ねることによって作られると考える方が妥当である。子育てをまかされ家族の世話をし、人間関係に配慮する女性の方がことばをより多く使うかもしれない。その経験が脳の機能差を生み出しているのかもしれない。⁽³⁹⁾ (傍点とアンダーラインは、吉澤が付した。)

上の文章は、厳密でもなければ、明晰でもない。それが厳密でないというのは、

(37) 青野・森永・土肥『ジェンダーの心理学』, 121-122頁。

(38) 青野・森永・土肥, 同上, 123頁。

(39) 青野・森永・土肥, 同上, 122頁。

最初の文では「構造」と「機能」が論じられているのに、最後の文では「機能」にしか触れられていないからである。経験と脳の「構造」はどう関係するのか？

青野氏の文章が明晰でないというのは、「脳は…作られる」の意味を特定化することが不可能だからである。「脳が作られる」とは、脳の重量増加を意味するのか？ 脳の左半球が大きくなるということの意味するのか？ 脳梁が太くなるということの意味するのか？

しかし、より重大な論点は、青野氏が、「生後のさまざまな経験や学習によって脳に変化が生じる」としている部分（先の引用分でアンダーラインを付した部分）である。これは、「脳の構造や機能の差が、言語能力や空間能力の男女差を生み出す」という、脳の研究者の仮説と正反対のものになっている。

一方（青野）は、行動の差が脳の差を生むと言い、他方（脳の研究者）は、脳の差が行動の差を生むと言う。いずれが正しいのだろうか？

(3) ピーズ夫妻の例示

どのような「仮説」でも、アド・ホックな補助仮説を案出し続けられる限り、少なくとも原理的には、守り通すことができる〔2.3.1.(2)参照〕。しかし、そんなことをしていれば、いずれ、そうした「仮説」は誰からも相手にされなくなるのではないか？

ピース夫妻の提示する3つの事例は、フェミニストにとって、相当な痛手を与えるものである。第1の事例は、空間能力の男女差についてのものである。

「アメリカのD・ウェクスラー博士は、性別による偏りを排除した空間IQテストを考案した。そして原始的な部族から近代都市の居住者まで、ありとあらゆる文明に暮らす人を対象にテストを実施してみた。すると、女のほうが脳は小さいにもかかわらず、総合的な知能は三パーセントほど男を上回っていた。ところが迷路パズルだけは、洋の東西を問わず男のほうが圧倒的に強いという結果が出た。」⁽⁴⁰⁾（傍点は、吉澤が付した。）

もし、これが正しいとすれば、空間能力の男女差は「近代産業社会の産物」ではない、ということになる。

第2の事例は、男女の赤ん坊についてのものである。

⁽⁴⁰⁾ Pease, Allan / Pease, Barbara: *Why Men Don't Listen and Women Can't Read Maps*, p. 114. (藤井留美訳『話を聞かない男、地図が読めない女』, 120頁)。

「女の子の脳は人間や人の顔に、男の子の脳は物体やその形に反応しやすい。生後数時間から数カ月までの赤ん坊を調べると、例外なくひとつの事実が明らかになる。男の子はものに、女の子は人に興味を示すのだ。

男と女が配線の異なる脳で世界を見ていることは、科学的な数値にもはっきり現れている。女の赤ん坊が、人間の顔に注意を向け、相手と目を合わせる時間は男の子の二～三倍も長いし、男の赤ん坊は不規則な形・パターンをした動くおもちゃを見る時間が長かった。

生後一二週ぐらいになると、女の子は家族とそれ以外の人間を写真で見分けられるようになる。男の子にはまだ無理だが、そのかわりなくなったおもちゃを見つけるのが得意だ。社会による条件づけがまだ行なわれていない、いわば白紙の状態⁽⁴¹⁾で、すでにこれだけのちがいが現れている。」(傍点は、吉澤が付した。)

上の引用文に対するコメントは不要であろう。

最後は、異なる環境下で育った一卵性双生児についての事例である。

「異なる環境で育っても、双子のどちらかがゲイであれば、片割れの二人にひとりにはゲイなのである。さらにヘテロセクシャルと答えた片割れのうち一～二割は、女性も愛せるバイセクシャルだからというので、とりあえずヘテロセクシャルと答えたことが考えられる。だから実際には六〇～七〇パーセント、つまり三人に二人がゲイだと推測できる。やはり同性愛指向は、胎児期に形作られるものであって、しつけや育ちはほとんど影響しないのだ。」⁽⁴²⁾(傍点は、吉澤が付した。)

以上のような事例に対して、フェミニストはどう応えるのだろうか？

2.4. ジェンダー・フリーへのコメント

(1) 両性具有は理想となるか？

「男らしい男」や「女らしい女」となるよりも、男のよさと女のよさを兼ね備えた「両性具有」を目指すのがよい、と『ジェンダーの心理学』の著者たちは主張している。確かに、男のよさと女のよさを兼ね備えたような人間になれば、それに越したことはないが、それは難しいのではないか？ 男も女も、それぞれ自分の得意なものを伸ばして行く、という方が実際的ではなからうか？

(41) Pease, Allan / Pease, Barbara: *ibid.*, pp. 140–141. (同上, 145頁)。

(42) Pease, Allan / Pease, Barbara: *ibid.*, p. 196. (同上, 198頁)。

ピーズ夫妻は次のように述べている。

「男と女はそれぞれ得意分野がちがうのだから、何か不得意なことがあったとしても、くよくよすることはない。練習すればうまくなるが、無理をして自分の人生、あるいはパートナーの人生を棒に振らないように。⁽⁴³⁾」

(2) 性分化異常への対応

『ジェンダーの心理学』の第1章で、青野氏は次のような議論を展開している。⁽⁴⁴⁾

1. 心の性は身体の性とは別のルートで作られ、身体の性よりも強固で、本人のアイデンティティの基礎となっている。
2. 心の性は身体の性とは異なり、社会の中で作られる可能性が非常に大きい。
3. この社会が男女の差異を問わなければ、我々が自らの性別にそれほどこだわることもなくなる。
4. 我々が性別にこだわらなくなれば、「性分化異常」の故に、自分は男なのか女なのかと悩んでいる人物の「性同一性障害」もなくなる。
5. 従って、公的な文書から性別欄を削除するという動きは歓迎すべきことかもしれない。

ピーズ夫妻の考えはこれとは違う。ゲイやレズビアンについて論じた箇所で、彼らは次のように述べている。

「世間の風は、基準からはずれた生きかたを自分で選択した者には冷たいが、生まれつきの障害には温かい。サリドマイドしかり、パーキンソン病、自閉症、脳性マヒしかり。こういう病気は、生まれたときから悪条件を背負っていることが多いために、社会は積極的に受け入れようとする。ライフスタイルとしてみずから選択したとされるホモセクシャルとは、一線が引かれているのである。

左ききや失読症だから、さらに極端なことを言えば、青い目だから、赤毛だからという理由で人を批判できるだろうか？ だとすれば、なぜ男の身に女の脳を持つ人は差別されてしまうのだろうか？ ホモセクシャルの人たちは、自分の性的指向が選択の結果だと誤解している。その『選択』をことさら前面に押し出そう

(43) Pease, Allan / Pease, Barbara: *ibid.*, p. 135. (同上, 142頁)。

(44) 青野・森永・土肥『ジェンダーの心理学』, 17頁。

とするから、自分たちは傷つくし、世間からも拒絶されてしまう⁽⁴⁵⁾。」(傍点とアンダーラインは、吉澤が付した。)

青野氏の主張は、「心の性は社会の産物である」という事実言明と、「性同一性障害者の苦しみを和らげるために、公的な文書から性別欄を削除すべきである」という価値言明とから成り立っている。これに対して、ピーズ夫妻が提示しているのは、「ホモセクシュアルも病気的一种である」という事実言明である。ゲイやレズビアンについて論じた『話を聞かない男，地図が読めない女』の第8章には、「ゲイやレズビアンの当事者あるいは世間は、～すべきである」といった価値言明はない。

しかし、「男と女は～すべきである」という価値言明は、『話を聞かない男，地図が読めない女』のそこそこに認められる。3.3では、それに焦点を当てることにしたい。但しその前に、『ジェンダーの心理学』にある「事実言明」と「価値言明」の関係に整理をつけておこう。

3. 女ももっと幸せに男ももっと幸せに

3.1. 事実と価値① —— 男女の違いと女性差別

日本料理とフランス料理は違う。これは「事実言明」である。事実言明は「真」であるか「偽」であるか、いずれかである。「日本料理とフランス料理は違う」という事実言明は「偽」である、などと主張する人は恐らく存在しないであろう。

「日本料理のよさとフランス料理のよさを組み合わせた料理を創作すべきであって、日本料理そのもの・フランス料理そのものは消滅させるべきである」——これは価値言明であるが、このような提案をする人も存在しないであろう（と信じた）。価値言明に関しては、真偽は問題とならない。

社会科学の方法論を少しでも学んだ者には、事実言明と価値言明は別次元にある、ということは周知のことである。しかし、フェミニストの議論においては、事実言明をいつの間にか価値言明にすりかえる、といったことがしばしば行われる。『ジェンダーの心理学』の「はしがき」で次のように述べられている。

「この本では、人々が抱く『女性と男性についての思いこみ』に焦点を当てている。女性、男性と言っても皆違う人間であるし、たとえ女の特徴、男の特徴があ

(45) Pease, Allan / Pease, Barbara: *Why Men Don't Listen and Women Can't Read Maps*, pp. 192–193. (藤井留美訳『話を聞かない男，地図が読めない女』, 195頁)。

ったとしても、その特徴は時代や社会によってさまざまである。それにもかかわらず、人々の女性と男性についての見方はあまりにも凝り固まっているのではないだろうか。

たとえば、『やっぱり男と女は違う』とか、『やっぱり男は女より偉い』とか。これは思いこみと言ってもいいほどのものであり、心理学では『ステレオタイプ』とよんでいる。⁽⁴⁶⁾」(傍点とアンダーラインは、吉澤が付した。)

「男と女は違う」は事実言明であり、『ジェンダーの心理学』の著者たちも、これを「真」だと認めているのは、上記引用文の傍点を付した部分からも明らかである。それに対して、「男は女より偉い」は、事実言明か価値言明か解釈の分かれる余地がある。例えば、それを「企業や官公庁の管理職は男の方が多い」ということを意味していると解釈すれば、それは事実言明ということになる。しかし、そうした解釈にはこじつけの感があり、「男は女より偉い」は価値言明と考えるのが自然であろう。

「日本料理とフランス料理は違う」という事実言明を、「日本料理の方がフランス料理よりも格が上である」という価値言明に直結させることは、方法論的に許されない。同じように、「男と女は違う」から「男は女より偉い」を演繹することはできない。

但し、こういった論法を展開する人たちに同情の余地はある、と筆者は考えている。というのも、「これまでの人間の歴史の中で、⁽⁴⁷⁾差や違いは単なる差や違いにとどまらず、社会的序列や区別や差別に利用されてきた」からである。

勿論、同情はできるにしても、そうした論法を採るべきではない、と筆者は考える。事実言明と価値言明を明別しないならば、「なぜ男女の差異が女性差別につながったか」が明らかにならず、男女平等を実現するための方法を見つけられないからである。

3.2. 事実と価値② —— 差別なき差異

人類の歴史において、男女の差異が女性の抑圧（女性差別）に用いられてきたのであろう。また、「女らしさ・男らしさ」についての「ジェンダー・ステレオタイプ」が女性差別を固定化し・増幅してきたという、『ジェンダーの心理学』の著者たちの主張にも大いなる真理が含まれている、と筆者は考える。

(46) 青野・森永・土肥『ジェンダーの心理学』, iv頁。

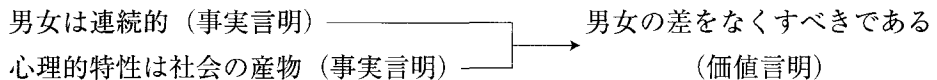
(47) 青野・森永・土肥, 同上, 124頁。

さりながら、男女の差異を利用した女性差別がなぜ始まったのか、という疑問は残る。これを説明する理屈が欲しい。ピーズ夫妻の答えはこうである。⁽⁴⁸⁾ 男性ホルモンであるテストステロンは、成功・達成・競争のホルモンであって、これが男の攻撃性を高める。この攻撃性の故に、人類で男が優位に立ってきた、というのである。しかも、その男の中でも、テストステロンの一番多い者が支配者となる。

これはかなり説得力ある主張である、と筆者は考える。もし、それが正しいとすれば、男の攻撃性が女性差別の原因であって、この男の攻撃性が女性の抑圧につながるような工夫をこらす必要がある。そうであるとすれば、女性差別をなくすために、男女の差をなくそうとする「ジェンダー・フリー」運動は見当はずれのものである、ということになりはしないだろうか？

* * *

ここまでの議論を整理してみよう。『ジェンダーの心理学』の著者たちの主張は次のように図式化できる。



仮に、「男女は連続的（生物学的に女と男は連続したもの）」並びに「男女の心理的特性は社会の産物」という2つの事実言明が「真」であったとしても、そうした2つの事実言明と、「男女の差をなくすべきでない」という価値言明を並立させることは許される。

しかし、事はその程度の所には止まっていないように見える。脳科学の進歩によって、「男女は非連続的であり（事実言明）」且つ「男女の心理的特性は相当部分が生得的である（事実言明）」ことが判明しつつある。こうしたことが事実であるとすれば、「男女の差をなくそうなどと努めるべきではない（価値言明）」ということになろう。

3.3. ピーズ夫妻の問題提起

男と女は違うのだから、男女共にそれぞれの違いを知った上で相手に接すれば、

⁽⁴⁸⁾ Pease, Allan / Pease, Barbara: *Why Men Don't Listen and Women Can't Read Maps*, p. 7, pp. 178–180. (藤井留美訳『話を聞かない男、地図が読めない女』, 21頁, 184–185頁)。

男も女ももっと幸せになれるというのが、『話を聞かない男，地図が読めない女』の主旋律である。しかし，同書にはそれを越えた問題提起がある。「女が家にこもって，子育てと家事に専念する時代は終わ⁽⁴⁹⁾」り，「家族を養う役割が男だけにまかされる時代ではなくなっている⁽⁵⁰⁾」とピーズ夫妻は言う。

親世代の経験は役に立たず，「私たちは，望ましい役割モデルを持たない最初の世代なのだ⁽⁵¹⁾」というのである。ピーズ夫妻は次のように述べている。

「あなたが一九六〇年以前の生まれなら，おそらくあなたの両親は，古代から続いてきた男女の役割分担をそのまま踏襲しているはずだ。その行動パターンはそれぞれの親から学んだものだし，その親たちも両親の姿を模倣していた。こんな具合にさかのぼっていけば，役割がはっきり分かれていた洞穴の時代に行きつく。

だが，その役割分担が消えてしまった現在，親世代の経験はまったく役に立たない。夫婦の離婚率は五〇パーセント前後だが，事実婚や同性愛カップルまで計算に入れると，破局率は七〇パーセントを超えるのではないだろうか。二一世紀という新しい時代に，精神的に満ちたりた幸せな生活を築くには，いままでとちがう新しいルールを学ぶ必要がある⁽⁵²⁾。」（傍点とアンダーラインは，吉澤が付した。）

「男は狩に，女は家で」という役割分担を余儀なくさせられた時代が終わって，「新しいルール」を構築するに当って，フェミニストが提示したのは，「男女の差を可能な限り縮小し，女も男と同じように働けるようにする条件を整備せよ」というものであった。しかし，本来相当に異なった生き物である「男」と「女」の差をなくすことなどはできないし，また，なくそうと努めるべきでもない，と筆者は考える。

更に，女に男と同じように働くことを求めるべきでもない。乳幼児を抱えた女がフルタイムの仕事を続けるのは容易なことではない。そして，そのような場合には，子供に悪い影響が出る，ということは容易に想像できる。従って，乳幼児を抱える母親は働かなくてもよいような社会を作ることが望ましい。そういった意味で，「就労 — 子育て — 再就労」といった，俗にいう「M字型就労形態」は理にかな

(49) Pease, Allan / Pease, Barbara: *ibid.*, p. 14. (同上, 29頁)。

(50) Pease, Allan / Pease, Barbara: *ibid.*, p. 160. (同上, 164頁)。

(51) Pease, Allan / Pease, Barbara: *ibid.*, p. 88. (同上, 96頁)。

(52) Pease, Allan / Pease, Barbara: *ibid.*, p. 15. (同上, 30頁)。

ったものである、と筆者は考える⁽⁵³⁾。

次に、仕事の中で、女は男に対抗できるか、という問題がある。大手の会計事務所⁽⁵⁴⁾で起っている昨今の現象に関して、ピーズ夫妻が述べていることは、職場における男女の関係のあるべき姿を考える際のヒントになろう。つまり、数学的な推理力に関しては男の方が能力が高いが、相手とやりとりしたり・顧客の要望を汲み上げるのは女の方がうまいので、女会計士が顧客獲得や顧客対応に当り、数学的な計算は男性助手に任されたりすることが多い、というのである。

「男の能力と女の能力を十分に活用し切っている」企業は、「男の能力は活用するも女の能力を活用し切っていない」企業に勝つであろう。前者の企業においては、女はその働きに応じて、地位と報酬を与えられるに違いない。このような企業が増えれば増えるほど、仕事の世界における男女平等は、より実質的なものとなって行くだろう。

⁽⁵³⁾ この点に関しては、拙稿「フェミニズムと家族 (2)」〔『広島経済大学研究論集』第27巻 第2号 (2004年9月)〕の2.3を参照されたい。

⁽⁵⁴⁾ Pease, Allan / Pease, Barbara: *Why Men Don't Listen and Women Can't Read Maps*, p. 130. (藤井留美訳『話を聞かない男、地図が読めない女』, 137頁)。